

未来館 ニュース

福島県男女共生センター広報誌

MIRAIKAN NEWS

いまでいいに暮らして
いぐべない

ふくしまの言葉
「までい」とは、手間ひま惜
みず丁寧な心を含めて、
という意味。語源は、「真
手」と書いて「両手」の意
味。似たような言葉は全国
あちこちにあるらしい



CONTENTS

- 特集 女子“防災”力をUPする(p.2)
- 事業レポート 講演会「“プロ主夫”直伝!らくちん男の家事」(p.6)
- 未来館フェスティバル2012(p.7)
- 会津助産師の家 おひさま

vol. 45

「介護ロボット」体験会 開催中!

当センター福祉機器展示室に、介護施設等でコミュニケーションを目的として開発されたロボットを3体展示しています。

どの機種もかわいらしい動きをします。最新の介護ロボットに触れるチャンス、ぜひ体験してみてください!

■コミュニケーションロボットの展示・体験

期間: ~平成25年2月28日 9:00~17:00

場所: 福祉機器展示室(1階)

機種: パロ(アザラン型ロボット、
開発: 独立行政法人産業技術総合研究所)

うなずきかぼちゃん
(子ども型ロボット、開発: ピップ)

パルロ
(人型ロボット、開発: 富士ソフト)



特集

女子“防災”力をUPする

災害時の被災者支援や復興、防災・減災などさまざまな分野において、男女共同参画の視点で、多様な機関等と連携しながらより積極的に活動できる女性を育成するため、「つながり ひろがる 地域的女子“防災”力UPセミナー」を開催しました。

セミナー内容	
10/13(土)	<p>講話「福島の防災・復興と男女共同参画の状況」 講師：松崎健一さん(福島県青少年・男女共生課長)</p> <p>講義「女性×男性の視点で総合防災力アップ」 講師：浅野幸子さん(東京女学館大学非常勤講師)</p>
10/14(日)	<p>ワークショップ「協働のための提案力を磨こう」 講師：服部篤子さん (CAC—社会起業家研究ネットワーク代表)</p>
10/20(土)	<p>「自己尊重・自己主張トレーニング～いざという時にこそ“ガマン”しない女子でいよう！」 講師：丹羽麻子さん(女性の自立を応援する会)</p>
11/3(土) 11/4(日)	<p>講義「多様な専門機関、専門家、ボランティア等との連携・協働がなぜ必要か」 講師：天野和彦さん (福島大学うつくしまふくしま未来支援センター)</p> <p>ワークショップ 「シュミレーション～未来館が避難所になったら？」 講師：天野和彦さん (福島大学うつくしまふくしま未来支援センター) 北村育美さん (中越防災安全推進機構、現おだかいさまセンター派遣)</p>

講演「女性×男性の視点で総合防災力アップ」

災害とは

災害と一口にいっても、いろいろな種類があります。地震、台風、大雨、洪水のような自然災害と同時に、戦争や紛争そして原子力災害など、人災といわれるようなものまで全て災害です。

災害では、被害が広域であるほど被災直後の公的救援はなかなか期待できません。普段、身の回りで起こる事件や事故であれば、すぐに救急や消防、警察が来て対応してくれるので何とかそこで収まります。しかし災害時は、通常の社会が持っている力だけではなかなか対応ができず、外部からの支援が必要になります。

災害の種類や発災時の状況によっても、被災のあり方は変わってきます。阪神・淡路大震災は午前5時46分の発生でしたので、家族が一緒にいた時間帯でしたが、今回の東日本大震災の場合は午後2時の発生でしたので、家族がばらばらの時間でした。そのため、安否の確認などお互いに心配されたのだと思います。また、阪神・淡路大震災の場合は、古い家屋の倒壊や、木造密集地域での火災の被害が大きくなりました。申し上げるまでもなく3・11では津波による被害が大きかったわけです。

さらに大規模災害をもっとよく見ていくと、発災直後の被害だけではなく、時間の経過とともに被害が拡大していく傾向にあります。

まず、災害の直接の被害があります。東日本大震災で言えば、津波や倒壊家屋の下敷きになって亡くなられた方など、地震による直接的な被害です。広域的に被災してしまうとすぐに救助ができず、被害者は増えてしまうことになります。また、道路や通信といったライフラインが被害を受けると、現地に駆けつけることが難しい上、どこでどういった人たちがどのように被害に遭っているかという情報が発信できず、さらに救援が遅れます。建物の被害が大きければ避難生活者が増え、その避難生活において、配慮しなければならない人たちへの対策が取られていないと、さらに犠牲者が増えるということになります。



講師 浅野 幸子さん

防災の基本～発災直後

災害の被害の大きさは社会の構造や備えで変わってきますが、どうやって被害を小さくしていくかというのが「減災」です。

一般的な地域防災・家庭防災の中で第一に大事なことは、自分自身や家族がけがをしないための耐震化・室内安全化です。けがをして動けなくなってしまうたら避難しようにもできないし、近所の人を助けようと思っても助けられません。

阪神・淡路大震災のときには、亡くなった方の8割以上が家屋の倒壊や家具の転倒による被害でしたので、まず今できることは室内の安全化です。

また、火災が起きた場合は初期消火がとて大切です。火災は天井まで上がってしまう前に抑え込まないと、消防車に駆けつけてもらわないと消せません。しかし、大災害であらゆるところで救助要請や出火の通報がある場合、自分のところで消防車が来てくれるとは限りません。できるだけ速やかに小さな火の段階でみんなで消化器を持ってきて消すことが大事ですので、地域の防災訓練も重要です。

防災の基本～避難生活

災害後の避難生活はとて多様です。災害が起こって被災したらず避難所に行く、というようなイメージを持つかもしれませんが、必ずしも全員が避難所に行くとは限りません。

避難所に行く理由は様々です。自宅を失ったから、余震などで自宅や職場にいるのが危険と感じる、ガス・水道・電気などが不通で自宅で生活できない、避難所に行けばいろいろ情報が集まるだろう、食料や物資がもらえるだろう等、様々な理由があります。

一方で、避難所に行かない、または行けない方たちもいます。自宅が何とか無事だったから避難所に行くよりはいいという方、避難所はプライバシーのない状態で耐えられないからという方もいます。また、小さな子どもや障がい者、認知症の方などの家族がいる場合、泣き声やパニック、徘徊などで、集団生活の中で迷惑をかけるからと避難所へ行けない方もいます。

しかし、そのような在宅避難者への支援は手薄です。過去の大きな災害でも起こったことですが、在宅避難者の方が、不足している食糧や物資などを避難所にもらいに行くことと断られトラブルになるなど、避難所と在宅避難、指定避難所とそれ以外のところの支援のあり方のギャップが課題になりました。

一方で、避難所も劣悪な環境が続きます。これまで被災者の避難所での生活環境改善ということをしっかり防災対策上考えてこなかったため、今まで以上に大変な避難生活がまた繰り返されてしまったというのが東日本大震災でした。プライバシーもなく、衛生状況も悪い中で避難生活を送ることで、避難所において心身の健康を損なうという事態になってしまいました。避難所における一般的な症状として、高血圧や高血糖、ぜんそくというような慢性病の悪化、肺炎・インフルエンザ・胃腸炎などの感染症、便秘・低栄養や不活発病、介護者不足による褥瘡(じよくそう)形成や悪化、ストレスの蓄積・不安・不眠などがあります。新潟県中越地震では、エコノミークラス症候群で亡くなった方もいました。また、正確に統計をとったわけではありませんが、避難所生活では女性のほうが抑うつ傾向が強く、避難所生活が辛かったのではないかとこのような報告もありました。

防災の基本～帰宅困難者

もう一つ、災害直後の問題として考えておきたいのは帰宅困難者の問題です。発災時、自宅からかなり離れた場所にいた場合には、無理に帰ろうとははいけません。体力があり、しっかり装備もして、完全に安全な状況が確保されていれば動いてもいいと思うのですが、慎重に判断しなければなりません。

今回の震災でも、子どもが心配だからと車で迎えに行く途中に津波でお母さんが流されたけれども、実は子どもはすでに避難していたという例もありました。ですから、各施設や各階層で、災害時にどのような対応をするのかをきちんと共有しておくことが不可欠です。

災害時の女性の困難

避難生活では、女性は衛生面やプライバシーといった問題により厳しく直面し、それが時には病気とか、死にも関連していくということがあります。

下着を干す場所がないためぬれたままはいていたとか、やっと手に入れたきれいなウエットティッシュを何度も沢で洗っては下着に当てて、それで何とか衛生を保つようにしていたなどという話も聞きました。また、何日もお風呂に入れれないということで、膀胱炎や外陰炎などの婦人科系の病気になった人もたくさんいました。これは阪神・淡路大震災のときにも起こっていました

が、ニュースにはなりません。

それから、生理用品とか女性用下着など、必要な物資がすぐに届かない、また届いてもうまく手に入れられないということがあります。これは、多くの避難所の物資担当者が男性であることが多いのですが、物資の受付に地域の女性たちが座っていたり、小規模の避難所で女性と男性が両方で運営していたりすると、ものが言いやすく手に入りやすいようです。生理用品が年齢を問わずすべての女性に1枚ずつ配られたという笑えない話もありました。当事者の女性に聞けば済むのに、それがどうしてできなかったのか。

また、これまでの災害研究でも課題として挙がっているのですが、災害時にはケア役割を担う人、その多くが女性ですが、そういう人に家事労働などの負担がかかります。女性のみが炊き出しを行う場合も多く、これが長期化しかなりの負担となってしまいます。つまり、性別役割が災害時には強化されるということです。普段は夫と共に、家事も育児も仕事も対等にやっていますが、災害で保育所などの福祉サービスが崩れてしまうとあつという間に、男は仕事、女はケアというように、自分の家族のケアに加えて避難所のケアまで覆いかぶさってきってしまうという状況になるのです。

治安面の問題もあります。実際に強姦事件や強姦未遂も起こっていますし、避難所の中で触られたり、暴力をふるわれたり、盗撮されたりということが起こりました。また、家庭内の暴力の問題が顕在化したり増えたりする傾向があります。これまでの災害研究により、災害時にはこのようなジェンダーに関する暴力が増えることがわかっています。

災害時の男性の困難

災害時の男性の困難という面をみると、過労死のリスクは男性のほうが高いといえるでしょう。復旧作業のために毎日仕事をし続けていた男性が、ある日突然倒れていたとか、外国人労働者の方がみんな帰ってしまい、その穴埋めで働いていた人が過労死したということが報告されています。

それから、復興期には生活再建、事業再建のプレッシャーが大きくなり、うつやアルコール依存が増えます。阪神・淡路大震災のときには、仮設住宅の孤独死の75%が男性で、そのうちの多くに肝疾患が見られ、アルコール依存になっていたことがわかりました。

ジェンダー・多様性の視点

災害時要援護者として、これまでは高齢者、障がい者、乳幼児、妊産婦、傷病者、外国人の方が挙げられていました。しかし、私たち一人ひとりというのは多様な存在で、性別、年齢、家族構成など、様々な要因によって置かれた状況は違ってきますから、これまでの災害要援護者だけではなく、個別にきちんと配慮した支援対策が必要なのではないかと考えます。「スフィア・プロジェクト」という人道支援の国際基準というものがありますが、これは、国際赤十字や国連、NGOが、過去の様々な難民支援や紛争の支援などの中で、支援すべき人たちに支援が届かないのはどうしてなのだろうという考えから生まれてきているので、事細かに性別や年齢を区切り、乳幼児に必要な栄養はどれくらいか、医療支援のために必要なメンバーやキットなど、細かく書かれています。

阪神・淡路大震災の後に兵庫県に設立された「人と防災未来センター」で作成している「非常持ち出し品チェックリスト」では、個別に検討する品目という項目が設けられ、女性や高齢者、障がい者、外国人など立場別のリストが作られており、参考になります。



大規模災害における被災経験や困難は、女性と男性で全く異なりますが、これまでの日本の防災対策は、男性中心に行われてきました。市町村や都道府県の防災会議の委員に女性がゼロということもとても多かったのです。そのため、人口の半分を占めている女性の災害時の困難が十分に取上げられてきませんでした。男性が悪いということではなく、女性が防災分野の意思決定の場に対等に出ることができないことが問題なのです。暮らしの問題は女性のほうがきめ細やかに想像力も働くし、地域でのネットワークも女性のほうが持っていることが多いのですから、女性の参画は不可欠です。

国の「男女共同参画基本計画」や「防災基本計画」には、2005年から「男女双方の視点」や「女性の参画」と書かれて

いますが、これは、国際的な議論の影響や、2004年の新潟県中越地震がきっかけとなっています。重要なのは、市町村の計画に女性のニーズへの対応と女性の参画を組み込むこと、そして私たちの身近な避難所となる施設のマニュアルにこのような視点が落とし込まれて、住民が認識するところまで持っていくことです。そうしないと実際に役に立ちませんので、それを今こそ、しっかりとやっていく時だと思えます。

災害時の地域の助け合いは、トップダウン的なマネジメントになりがちですが、それでは女性や弱い立場の人を切り捨てるようなことになりかねません。様々な立場の人たちの主体性を生かして対応していくエンパワメント型のマネジメントこそが大切です。だからこそ、日常から防災のトップにちゃんと女性と男性を入れておかないと、声を上げられない状況になってしまうのです。

これからの防災

これからの防災は、女性がかつリーダーシップを発揮できるような環境をつくらなければなりません。地域の防災活動や避難所のマニュアルなど、身近なところにかに女性の視点を入れていけるか。それは女性自身の犠牲とか被害とかストレスを減らして救援活動にも力を発揮できるという直接的なメリットはもちろん、子どもたちの精神的ストレスを減らしたり、家族間の亀裂を防いだり、男性の困難を減らしたりという意味でも、とても重要なことだと思います。

今こそ女性たちが声を上げて、この災害大国日本での災害時の支援のあり方をどうしていくか、女性や暮らしの視点も入れてどう変えていくか、考えていく必要があります。

講話「福島県の防災・復興と男女共同参画の状況」

東日本大震災及び原発事故による福島県の被災状況や被災女性の悩み相談の概要、県の男女共同参画施策や防災対策等について学びました。

ワークショップ「協働のための提案力を磨こう」

(福島県男女共生センター & (公財)日本女性学習財団コラボレーションセミナー)

協働について知り、次の一歩につなげる提案力を身に着けるための講話とワークショップを行いました。

講話では、地域の課題に取り組むために、行政と住民、住民同士が「協働」し、実現に向けて多様な立場の人々と協力関係を築く大切さについて学びました。

その後、協働する、協力関係を築くためのスキルとして、目的と計画を明確にした提案力(情報発信力)を養うためのワークショップを行いました。



「自己尊重・自己主張トレーニング～いざという時こそ“ガマン”しない女子でいよう！」

女性と男性の置かれている社会的立場や状況の違いを理解するためのワークや、自分の意見をうまく相手に伝えるための練習などを行いました。

グループワークでは、女性と男性が集まる場所や状況を比較し、「男性は力仕事、決定権、稼ぎ手」「女性は補助的、地域、家庭」という男女の棲み分けがあることがわかりました。また、これまでに我慢した体験について「相手との関係」「その時の気持ち」「周りへの影響」について考え、我慢することは自分だけではなく周りにも悪い影響を与えてしまうこと、女性は人の期待に応えようとするのがより多くみられることもわかりました。

その後、実際の場面を想定し、自己主張するトレーニングを行いました。

いざという時にガマンしないために、言いたいことをはっきり



講師 丹羽麻子さん

させて相手に言い返されても繰り返し伝えること、コミュニケーション能力と人格は別物であり、上手に伝えられなくても苦手とは思わずに自分からためらわず行動することが大切であることを確認しました。

講義「多様な専門機関、専門家、ボランティア等との連携・協働がなぜ必要か」



ビッグパレットふくしま避難所を運営・支援した169日間についてお話をいただきました。

天野さんは、「この間、支援側にいろいろな力が必要だと思った。企画力、行動力、実行力も必要だ。でも最も必要なのは、想像力である。また、“生命を守るためには自治活動だ”と気づき、避難所内で交流の場の提供と自治活動の促進を行った。それには、専門機関等との連携・協働が不可欠であった。また、災害時には元々地域にあった課題が目に見えるようになる。普段、準備していること以上のことはできない。日ごろから人とのつながりやネットワークが大切である。」ということ強く訴えられました。

ワークショップ「シミュレーション～未来館が避難所になったら？」

避難所運営シミュレーションゲーム(HUG)を使用し、避難所運営のためのさまざまなノウハウを学びました。



講師 北村育美さん

避難場所となる施設の現状を把握する



シミュレーションゲームで行ったこと

- ・避難所となる施設(未来館)内の各部屋等を調査し、機能や特性等施設の現状を把握する。
- ・特に災害時要援護者への配慮を踏まえ、一人一人のニーズに配慮した避難場所を想定し、共有する。
- ・来場する避難者を受け入れる際、ニーズに即した避難場所を瞬時に判断・特定する。

受講者の感想～振り返りから～

災害時に、避難所は安全な場所になってもらいたいのには、女性にとってはさらに危険な場所になってしまうことがあるということを初めて知りました。

防災は特別なことではなく、普段の生活やネットワークが生かされることに気がきました。普段の地域力を高めることが災害に強いまちづくりにつながると思いました。

防災・復興・支援の決定の場に女性が複数いることが大切だと思います。

自己尊重、自己主張ができるようになると同時に、相手も尊重し、どんな場面でも「話し合い」ができるようにしていきたいです。



山田 亮さん

家事ジャーナリスト/「楽家事ゼミ」主宰
1967年 香川県高松市生まれ。
HP上で綴った家事・育児記録が新聞社の目にとり、執筆活動を開始。ロジカルな視点で「楽に家事をする」方法を日々実践し、「楽家事ゼミ」を主宰して情報提供や家事指導を行う。東京新聞での連載をはじめ、女性誌や育児雑誌での執筆・テレビ出演も多数。著書『プロ主夫山田亮の手抜き家事のススメ』(宝島社)。

皆さん、こんにちは。本当に声を大にして言いたいのは、男性の皆さん、よくお越しくさしました。この「男の家事」と名前がついている講座に、せっかくの休みなのにわざわざ来ていただいて、本当にありがとうございます。

主夫生活について

僕は、主夫をやって早13年と半年ぐらになりました。やっていてよかったと思うことがいくつかあります。例えば、子どもの成長をつぶさに見られるとか、家族の時間、夫婦の時間をしっかり持てるというのがありますが、今思えば、一番よかったことは、仕事っていいなということです。これは、離ればこそありがたさがわかる。仕事からいったん離れて子育てに専念していた時期などもそうでしたが、みんなのいるところに行って仕事をする、大人ばかりの場所って意味いいな、楽だなという実感がありました。仕事に戻りたいと思っていたときに執筆の話があって、それが新聞社の目に留まって連載が始まり、雑誌に載ると講演の依頼も来るようになって、今こうやって暮らしています。今でも平日は大体家事ばかりで、週末に仕事が多いのですが、そうすると、平日は家でこもっている分、外に出てパーンとはじけるというか、楽しいなと思えるようになりました。

家事の知恵

家事というのは死ぬまで毎日やるわけです。死ぬまで毎日何か食べ、何か着るわけです。そして、動けば必ずほりが出てきます。よう考えたら、最期、死ぬ直前までご飯の心配をせなあかんのやなと。ただ、逆に言うと、家事が面白ければ最期まで面白く生きることができるわけです。何か楽しみを見つける、何か面白いことはないかと思ながらやる。炊事、洗濯、掃除、全部が得意などという人はほとんどいません。いつも楽しくなくてもいいのです。しんどいときもあるし、元気なときもある。週1回でも、月1回でもいいから、この楽しむ仕掛けを用意することを提案したいです。そこで、僕がやっている例をご紹介します。週に1回、木曜日の夜、「新メニューチャレンジ」を設けています。僕はレシピ本を買うのが大好きで、「作ったらおいしいやいな、こんな作ってみたいな」と思っていっぱい買うのです。そこで、この

9月29日(土)“プロ主夫”である山田亮さんに京都よりお越しいただき、講演会を開催しました。主夫生活、家事の知恵、家族とのコミュニケーションなどについて、大変有意義なお話を聞かせていただきました。

チャレンジを週1回、とにかく決めてやってみる。皆さんもこれまで本を買ったけれども一個も作らなかった本があるかもしれません。それらを活用して、週1回ということは、年50個ぐらい新メニューができることになり、10年やると500個もできるのですよ。すごいですね。500種類もレパートリーが増えたら、これはすごいと思います。こういうチャレンジデーをつくるというのも一つの工夫だと思います。

僕はいろいろな料理にチャレンジするので、メニューを考える上でのヒントとして「レシプロット」というのを考えました。素材と調理法とテイスト、この3つを組み合わせます。例えば、「ジャガイモ煮るー和風」でイコール肉ジャガとか、「魚煮るー和風」で例えばサバのみそ煮とか、素材を組み合わせたり調理法を変えることでメニューがバリエーション豊かになり、マンネリを防ぐことができます。いつもやっていたこの「ジャガイモ煮る」をちょっと洋風にして、チーズを絡めてみたらどうやろうとか、グラタンに近いかもしれんとか、そういうふうでちょっとスイッチを入れるだけで、いろいろなアイデアが出てきます。それはメニューを開発していく、作り上げる上でマンネリ化を防ぐための一つのトレーニングだと思います。

一緒に家事をする

一緒に家事をする「共家事(ともかじ)」ということなのですが、皆さん、家事をするとよく言うのは、「自分の好きなようにしたい。やらせて」と。女性も男性も自分の好きなようにしたいのです。でも、これは残念ながら一人暮らしをするしか方法はありません。打開策はなかなかない。共同生活をする以上、大切なのは歩み寄りです。家事でやっていただきたいのは、三人寄れば文殊の知恵で、一人で家事をするよりも二人で家事をするほうが文殊の知恵に近くなります。「ああやったらええのにな」というのをはたで見ながら、「やっぱり言う悪いな」というのがあるとしたら、それはもったいない。「それ、こっちにしたらもっと楽やで」と一言言うだけでずいぶん変わります。結果オーライ。結果がよくなる、みんなが得をする、これをウイン・ウインといいます。お互いにおいしいとこ取りができるようにするためのコミュニケーションを「家事コミュニケーション」と僕は呼んでいて、言い勝つという勝負ではなくて、交渉ですね。みんながおいしいとこ取りができた方がいいなと思います。

男女共同参画

最後に僕が一番お伝えしたいのは、感謝と思いやりが大事だということです。男女共同参画ってすごく難しい言葉ですが、感謝と思いやりのことだと僕は感じています。仕事から疲れて帰ってきて、ご飯は自分で作らなきゃと思っているところに温かいおいしいご飯があったら、ありがたいことですよ。お互い、感謝と思いやりを持ればいいなと思います。今日は長い時間、おつき合いました。ありがとうございます。



未来館フェスティバル2012
~ともに歩もう ふくしま復興~
11月23日(金)、24日(土)



11月23日(金)、24日(土)に、未来館フェスティバルを2年ぶりに開催しました。「ともに歩もう ふくしま復興」のテーマの元、震災後の福島県の復興を目的にシンボルイベントや県民参加企画など多彩な催しを行いました。

オープニング

- 山木屋太鼓の演奏 ● 福島県男女共生センター館長あいさつ
- 福島県知事あいさつ

シンボルイベント

「ともに歩もう ふくしま復興」をテーマに、講演とトークセッションを行いました。

◆講演I 「災害と男女共同参画」

【講師】 堂本 暁子さん(前千葉県知事、男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表)
東日本大震災、原発事故の経験から、平常時の男女共同参画社会の実現が、災害に強い地域づくりにも資するものであることとお話いただきました。

◆講演II 「ふくしま再生のカギ」

【講師】 藻谷 浩介さん(日本総合研究所調査部主席研究員)
福島県の人口減少の現状から、再生に向け「女性の元気で人口減を吹き飛ばそう」、「男性の子育て日本一の県にしよう」との提言をいただきました。

トークセッション

【出演者】 堂本 暁子さん、藻谷 浩介さん、千葉 悦子館長(コーディネーター)



もっと男性が、おじいさんが家事をしていこう! みんなで出生率を上げよう!
(堂本さん)

女性の多様な働き方に向け、女性の起業(ベンチャー)の支援も必要!
(藻谷さん)

その他、被災者支援活動に取り組む団体、復興に向け立ち上がった女性団体など、地域づくりに取り組む団体が、活動の紹介やワークショップをとおして来場者の皆さんと交流を深めました。また、出店や昔懐かしい「紙しばい」、豚汁の「大盤ふるまい」、無料の「お休み処」などにも多くの来場者がありました。



きっかけ

震災後、県内の助産師たちは、各地域で避難生活を送る母子たちの支援を行っていました。というのも新聞や報道では、母子たちの情報が全くと言っていいほどなく、母子への支援も行われていない状況でした。そのため助産師たちはそれぞれができることをやっていたのです。そうするうち、震災後県内の妊婦を受け入れ、出産を支援していた東京都助産師会から、産後の母子の受け入れ先が必要という話があり、都助産師会の支援を受けて、「会津助産師の家 おひさま」が立ち上がったのです。

放射能の心配もありますから、県内でも放射線量の低い会津地域に一軒家を借り、「おひさま」はスタートしました。

活動内容

「おひさま」では、産後の母子を受け入れ、5人の助産師が交替で、24時間ケアにあたっています。24年10月までに入所した母子は44組で、利用者は増加傾向にあります。出産後すぐに入所する方もいれば、産後1、2ヶ月経って、行き詰まりうつ状態になって家族に連れてこられる方、できるだけ放射線量の低いところで過ごしたい方など、様々な方がいます。24時間生活を共にしながら、助産師たちは人生の先輩として昔から受け継がれてきた大切なことを伝え、日常生活にスムーズに戻るよう支援します。また、母親同士の交流の場にもなっていて、お互いに話をすることで不安も解消できるようです。ここに来たお母さんの顔が、一日一日変わっていき、退所するときには大きく成長しているのがわかります。

そのほかに、母乳に関する相談やケア、子育てや女性の健康に関する相談、母乳検査受付窓口も行っています。

これから

実は、この事業は都助産師会からの支援が終わる24年6月で終了する予定でした。でも、母親たちからの強い要望があって、寄附などで現在まで運営を続けてきました。今後、新たな支援も受けられることになり、継続できることになりました。

24年12月からは、猪苗代町へ移転することになり、これまで以上に様々な活動ができると思っています。入所しているお母さんがリラックスできるような企画や、妊娠中から出産後までを学ぶ一連の講座など、いろいろとやりたいことがたくさんあります。

産後のケアは、これまでよく知られていなかったため、支援が手薄でした。しかし、出産を前後とした時期の支援をしっかりとすることで、産後うつや児童虐待などを防ぐことができるし、その支援ができるのは私たち助産師だと思っています。将来は、「おひさま」のような施設が県内各地域にでき、被災県である福島がモデルになって、産後ケア施設が全国に広がればうれしいです。



二瓶律子さん

会津助産師の家 おひさま

耶麻郡猪苗代町大字三ツ和字三城潟752-1 電話・FAX0242-85-8303
URL <http://fukushima-midwife.org/ohisama/>

「会津助産師の家おひさま」は、産後間もないお母さんと赤ちゃんが、安心して過ごせる場所として、県内でも放射線量の低い会津若松市に平成23年8月に開設されました。震災後、避難生活や放射能への不安など、福島の女性たちはこれまでに例のないストレスにさらされています。そのような女性たちに寄り添い、支援を続ける「おひさま」の活動を紹介します。お話を伺ったのは、「おひさま」を運営する助産師の一人である二瓶律子さん。二瓶さんにお話を伺っている間にも、家庭訪問した母親や母乳トラブルを抱える方から相談の電話があり、こういった施設を必要としている方がたくさんいることを実感しました。

原子力災害避難者の方「半額」で宿泊できます!

詳しくは当センターにお問い合わせください。
企画調査課 電話0243-23-8303

- 対象：原子力災害により次の市町村から避難し、生活している方
※田村市、南相馬市、川俣町、広野町、楡葉町、富岡町、川内村、大熊町、双葉町、浪江町、葛尾村、飯館村
- 宿泊目的：地域コミュニティ活動、家族や友人との交流など
- 宿泊料金：1人で宿泊する場合：1泊2,100円（通常4,200円）
2人以上で宿泊する場合：1人1泊1,900円（通常3,800円）

mi rai kan

未来館 ニュース

福島県男女共生センター広報誌

2013.1 vol.45

■編集・発行

(財)福島県青少年育成・男女共生推進機構 福島県男女共生センター（女と男の未来館）
〒964-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
TEL(0243)23-8301(代) FAX(0243)23-8314
ホームページアドレス <http://www.f-miraikan.or.jp>
メールアドレス mirai@f-miraikan.or.jp

女と男の未来館

検索